

第 46 回 企業活性化研究分科会・議事録

< 第 46 回 2012 年 2 月 25 日 (土) 時間 : 13 : 30 ~ 16 : 30 於 : 専修大学 (神田校舎) >

参加者 : 井端、大野、木村、小林、齋藤、柴山、杉本、高市、星野、山本、渡邊
(11 名)

1. テーマ : 再生企業の研究

- ・ 報告者 : 井端和男
- ・ 配布資料 : 7 枚
- ・ 報告内容の要旨

本報告は、株式会社ダイエー (以下、「同社」という。) の再生について分析したものである。同社は、1995 年度から 2011 年度まで売上高の下降傾向が続き、17 年間赤字基調が続いている。

赤字基調脱却のため、2007 年 3 月にイオン及び丸紅と資本・業務提携を行い、両者の支援の下で再生を続けている。支援開始後、企業業績は世界的な景気低迷を考慮すると悪いものではなく、また直近 5 年間の移動平均値でも、最近の 2 年間は当期純損益の黒字が続いていることを指摘し、黒字基調への転換を示していると推察した。

ただ同社は、収益の低下とそれに伴い総資産も縮小しているため、合理化によるコスト削減しても、それ以上に収益性が低下して、赤字が続くという縮小のスパイラル現象が起きている可能性も示唆している。

最後に、リスク重視の評価の観点から、直近 5 年間の財務指標の推移で同社を評価すると、自己資本比率が著しく高く、借金依存度も低い。並びに、総資産回転期間は極めて短く、効率的で、低リスク体質になっていると考察した。ただし、自己資本比率が高いのは、総資産が縮小したことにより、相対的に高くなっただけであり、必ずしも安全性が高くなったと評価することができない。したがって、再生途上の企業は、再生確実になったと見られるまでは、通常の企業評価基準とは異なった評価基準を適用すべきであると結論付けた。

2. テーマ : 『"TURNAROUND·RETRENCHMENT AND RECOVERY" by D.KEITH ROBBINS and JOHN A.PEARCE II』 についての翻訳の報告

- ・ 報告者 : 杉本敦彦
- ・ 配布資料 : 6 枚
- ・ 報告者 : 柴山祥明
- ・ 配布資料 : 3 枚